

万円のうち、3分の1近くをアルマ関連が占める。伊藤社長は「参入障壁は高いが、価格競争は少ないのが宇宙産業の利点」と話す。

名古屋市緑区有松。旧



PDエアロスペースが開発

する遠隔操縦実証無人機

東海道の宿場町の風情を残す街並みの裏手にプレハブ小屋が立つ。有人宇宙機を開発するPDエアロスペースの本拠地だ。従業員は、三菱重工業やアイシン精機に勤務していた緒川修治社長のみ。民間宇宙旅行の実現を目指している。

有人宇宙機が高度100メートルに到達するには、高度50メートルでマッハ3程度のスピードを出すエンジンが必要。同社は大気中と宇宙空間の両方で作動するエンジンを開発し、低コスト化を狙う。

エイチ・アイ・エスや

アイシン精機などの支援を受け、飛行機の自律航行システムの確立へ向けて実証実験を予定している。エンジン開発の準備だ。緒川社長は「欧米勢の約5年後、宇宙旅行の需要が増えたところに商品投入したい」という。

中部には、三菱重工業

・名古屋航空宇宙システム製作所（名古屋市）など宇宙産業の主要拠点が集積する。ただ、現状ではロケット「H2A」「H2B」の打ち上げは年間数機にとどまっている。宇宙をめざす中部の中小企業は、愛知県の補助金など

を活用して研究開発活動を続けている。

トヨタ自動車も、約80年前は織機工場内のベンチャービジネスにすぎなかった。「人間には生存領域を広げていく本能があり、人類の長い歴史を考えれば、宇宙に出ていくのは必然だ」（愛知工科大の中谷教授）。中小企業は独自技術を磨き、宇宙空間に新たな商機を広げようとしている。